

日本キリスト教会

府中中河原教会 × 東京中央伝道所

クリスマス・イヴ讃美礼拝

2020年12月24日 午後6時(オンライン)

日本キリスト教会

府中中河原教会

<https://www.fuchu-nakagawara-church.com/>

東京中央伝道所

<https://ccj-ccj.jimdofree.com/>

[礼拝への備え～祈りのほかに、なしていただく必要のあること]

今年のクリスマス・イヴ讃美礼拝は、府中中河原教会の主催により、同教会と東京中央伝道所の皆様とが(教会は初めて、という方をもお誘い合わせのうえ)、場所を隔てつつも共に顔を合わせる「オンライン礼拝」として行われます。

参加者は、パソコン等にZoom のアプリケーションを事前にダウンロードし、当日、以下のリンクを通して(指示に応じてパスコードを入力のうえ)入室してください。

当日カメラはできるだけオンにしてください。一方、司式者や先唱者以外の方のマイクは、讃美の時も含め礼拝中は一貫して「ミュート」にしてください。讃美は司会者やその他の者が先唱者として声をだし、伴奏なしで歌う予定です。

Zoom ミーティングへのご招待

トピック: クリスマス・イヴ讃美礼拝(府中中河原教会) - の Zoom ミーティング
時間: 2020 年 12 月 24 日 06:00 PM (30分前から「入室」可能です)

Zoom ミーティングに参加する <https://zoom.us/j/91830774959>

ミーティング ID: 918 3077 4959

パスコード: 750127

※ 技術的な困難を覚える方へ

1. 各教会の長老・委員に、前もって技術的なサポートをお願いしてください。
2. オンライン参加が不可能な場合、府中中河原教会(大石 080-9392-1127)に前日までにご連絡くだされば、府中中河原教会にお運びいただいでの出席も先着順で受け付けます(最大約15名まで)。
3. 2も不可能な場合、ここにお配りする式文により、できれば時間を合わせて、家庭礼拝をしてください。

式次第

[式文作成/司会/説教: 牧師大石周平(府中中河原教会)]

前奏/讃栄(動画)

朗読Ⅰ: イザヤ書 11:1-9

讃美 : 讃美歌 96 番「エサイの根より生いいでたる」

朗読Ⅱ: マタイによる福音書 1:18-23

讃美 : 讃美歌 21 231 番「久しく待ちにし 救いの主 来たり」

朗読Ⅲ: ルカによる福音書 2:1-14

連祷 : 讃美歌 21 93-2 番「栄光の讃美(グローリア)」

讃美 : 讃美歌 106 番「あら野のはてに 夕日は落ちて」

朗読Ⅳ: ルカによる福音書 2:15-20

説教 : 「さあ、ベツレヘムへ行こう」

祈祷 : 感謝と執り成し〜「ペストの詩」(ツヴィングリ)を踏まえつつ

讃美 : 讃美歌 111 番「神の御子は今宵しも ベツレヘムに生まれたもう」

朗読Ⅴ: マタイによる福音書 2:1-12

奉献 : 讃美歌 21 256 番「まぶねのかたえに」

朗読Ⅵ: ヨハネによる福音書 3:16-21

讃美 : 讃美歌 109 番「きよしこの夜」

頌栄 : 讃美歌 21 24 (=148) 番「たたえよ、主の民」

派遣と祝福

後奏(動画)

聖書は『聖書 新共同訳』を、讃美歌は 1954 年版『讃美歌』および『讃美歌 21』を用います。

朗読 I : イザヤ書 11:1-9

エッサイの株からひとつの芽が萌えいで

その根からひとつの若枝が育ち

その上に主の霊がとどまる。

知恵と識別の霊／思慮と勇気の霊

主を知り、畏れ敬う霊。／彼は主を畏れ敬う霊に満たされる。

目に見えるところによって裁きを行わず

耳にするとところによって弁護することはない。

弱い人のために正当な裁きを行い／この地の貧しい人を公平に弁護する。

その口の鞭をもって地を打ち／唇の勢いをもって逆らう者を死に至らせる。

正義をその腰の帯とし／真実をその身に帯びる。

狼は小羊と共に宿り／豹は子山羊と共に伏す。

子牛は若獅子と共に育ち／小さい子供がそれらを導く。

牛も熊も共に草をはみ／その子らは共に伏し

獅子も牛もひとしく干し草を食らう。

乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ／幼子は蝮の巣に手を入れる。

わたしの聖なる山においては／何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。

水が海を覆っているように／大地は主を知る知識で満たされる。

讃美 : 讃美歌 96 番1、3節 「エッサイの根より生いいでたる」

※ この礼拝では、「頌栄」以外では、曲の終わりの「アーメン」を歌いません。

(Home Page や SNS での公開にあたり、楽譜を削除しました)

3.

たえにとうとき イエスの御名(みな)の

かおりはとおく 世にあまねし。

いざやともに

よろこびいわえ、このよき日を。

詩: Flos de Radice Jesse (ドイツの古ラテン語讃歌)

曲: Es ist ein Ros' entsprungen (ドイツ・キャロル)

イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。

「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」

このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。

「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」

この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。

詩： Veni, veni, Emmanuel (ラテン語聖歌、9世紀)

曲： VENI EMMANUEL (行列聖歌、15世紀)

朗読Ⅲ/Ⅳ：ルカによる福音書 2:1-14/15-20 [後半は連禱と讃美後]

そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録をせよとの勅令が出た。これは、キリニウスがシリア州の総督であったときに行われた最初の住民登録である。人々は皆、登録するためにおのおの自分の町へ旅立った。ヨセフもダビデの家に属し、その血筋であったので、ガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。身ごもっていた、いいなずけのマリアと一緒に登録するためである。ところが、彼らがベツレヘムにいるうちに、マリアは月が満ちて、初めての子を産み、布にくるんで飼い葉桶に寝かせた。宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからである。

その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼い葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ。」

天使たちが離れて天に去ったとき、羊飼いたちは、「さあ、ベツレヘムへ行こう。主が知らせてくださったその出来事を見ようではないか」と話し合った。そして急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、羊飼いたちは、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話に不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりであったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

連禱：讃美歌21 93-2 番「栄光の讃美(グローリア)」

(太字の部分を会衆が[ミュートのまま]声に出して祈ります。)

いと高きところには、神に栄光がありますように、

地にある神の民に、平和がありますように。

私たちの主なる神、天にいます王、全能の父なる神よ、

私たちはあなたをあがめ、あなたに感謝し、

あなたの栄光をたたえて、讃美ささげます。

父なる神のひとり子、主イエス・キリストよ、

主なる神、神の小羊、

あなたは世の罪を取り除かれます。

主よ、あわれんでください。

世の罪を取り除かれる主よ、

私たちをあわれんでください。

ただあなただけが聖なるかた、あなただけが私たちの主、

ただあなただけがいと高きイエス・キリスト

聖霊と共に、父なる神と共にいます主に、

栄光がありますように。アーメン。



讚美 : 讚美歌 106番1,3,4節 「あら野のはてに 夕日は落ちて」

説教 : 「さあ、ベツレヘムへ行こう」 [礼拝では一部要約して語ります]

「さあ、ベツレヘムへ行こう。」 そう言って、まぶねの幼子にまみえ救い主を仰ぐ喜びに溢れる、世界最初のイヴ讚美礼拝。その交わりの中心へと導かれる、幸福な牧者とその群れ。皆さんは、朗読された一連のお話を、心温まるクリスマス物語としてお聞きになっておられるでしょうか。羊や牛馬も見守る、光の聖夜の物語。ええ、昨年までの私たちがならそう聞くところ。ただ今年は、ちょっと違う思いも湧いてくるのではないのでしょうか。

「さあ、礼拝に行こう。」 これほどまでにこの言葉をもって呼びかけづらいクリスマス・イヴが来るなどとは、昨年の今頃の私たちは想像もしていませんでした。もちろん、なおも私たちは、教会として一所懸命に主張するのです。礼拝は信仰者の命であり、大切だから休めない。その切実さの度合いは、生活のかかった飲食店の店長にも引けをとりません。だから皆さん、体調管理を徹底しつつ「さあ、府中中河原や国立谷保へ、礼拝に行きましょう」。しかし、そう呼ばれる側で言い添えてもきたのではないのでしょうか。体調を崩しがちな人に、いつも以上にきっぱりと、37度5分の線引きをし、高熱・持病のある方はどうか外出自粛をお願いしますね、と。やはり、礼拝を続けようが、休止措置を余儀なくされようが、いずれにしても、私たちは、これまでどおりとはいかない。礼拝の大切さを強調し「さあ、行こう」と言うほどに、応えられない兄弟姉妹がいる現実には浮き彫りになります。そして彼らを見捨てることも、当然私たちの信仰的見地からして、できません。

多くの教会、とくに日本キリスト教会のように教理の正統性においてメインラインに属すると自負してきた教会の牧師や長老、委員たちが、このコロナ禍に気づかされたことがあります。それは、これまで私たちが、「礼拝に行こう」とは普段から言えない境遇にある人の視座に立って礼拝を考える眼差しを、決定的に欠いていた、ということです。その点で教会も世の中と変わらなかった、とさえ言える。学校であれ会社であれ、映画館であれ劇場であれ、また旅先であれ、どこでも行ける。多数派のいう「日常」を難なく自分のものと考えられる人は、私たちににとっての「非日常」を、日常的に生きている他者の声に耳を塞ぎ、そっぽを向いて、その視座でものを視ようとはしてきませんでした。

しかし、どうでしょうか。聖書はむしろ、神こそはその視座で世の現実を眼差ししておられる、と伝えます。ルカによれば、イエスがお生まれになった夜に郊外にいた「牧者」、つ

3	4
みうたをききて ひつじかいらは、	今日しも御子は うまれたまいぬ。
まぶねにふせる み子をおがみぬ。	よろずの民よ、 いさみてうたえ。
グロリヤ イン エクセルシス デオ	グロリヤ イン エクセルシス デオ
グロリヤ イン エクセルシス デオ	グロリヤ イン エクセルシス デオ

詩: Les anges dan nos campagnes (フランス・キャロル、18世紀)

曲: IRIS(GLORIA) (フランス・キャロル、18世紀)

※「グロリア イン エクセルシス デオ」=「いと高きところに栄光 神にあれ」

まり家畜の群れの「羊飼」は、後の教会で「牧会者」と呼ばれる人たちのように、共同体の真ん中にデンと構えるような状態にはありませんでした。むしろ、人々が集まる街の外にいて、「野宿をしながら羊の群れの番をしていた」のです。つまり、今夜はもちろん、今後も家族のもとに帰れないという外国人実習生や、境をこえて生きる出稼ぎの労働者と同じような状態で。もしかすると家族を失った寡婦やシングルマザー、あるいは帰る家もないハウスレス／ホームレスの人に似た状況で、食べるのに精いっぱい、風雨をしのぐ屋根や壁どころか、町の城門の守りもなく野ざらしで、住所と共に何の肩書も所属もなく、自然の猛威に曝される現実にあった、と想像すると大げさでしょうか。いずれにしても、ここでは群れのために責任を覚える牧者こそ、不安な眠れぬ夜を過ごしています。このままではさまよい散らされる羊たち、その傍（そば）にいななければならない。離れた家族はどうしているだろう。明日一日生きるだけの望みは残っているか。闇深み、見えない不安がいよいよ襲ってくる時間帯、その心は不安定極まるものであったと思われる。

聖書の物語は、私たちの想像力を刺激し、単なる文献釈義をこえて物語の舞台に立つように誘います。今宵の私たちは、羊飼いがうづくまる暗闇の野に立たされて、コロナ禍で覚えた「見えない不安」の脅威を、いつにもましてリアルに思わずにおれません。狼のように突然襲い来る感染症は、ウイルスや病気それ自体もこわいのですが、じつは不安それ自体に支配されることが、暗夜行路の群れの指導者にとっては致命的です。

しかしそのような不安の支配する闇夜の只中に、輝かしい福音の語り手が現れます。「主の天使」と呼ばれる、天来のメッセンジャーです。ここで私たちは、共同体の外に追いやられる不安の只中に置かれた者として、天使が語る福音に耳を傾けるよう促されます。天使は、私たちの状況を変えるためにきたのでしょうか。何かすばらしいクリスマスプレゼント、いや贅沢は言わないが何らかの支援物資が期待できるのでしょうか。たとえば町に帰れば膨れ上がって私を苦しめる借金を帳消しにするような宝物？ 病に比べられるような、見えない不安の終息宣言？ 政治体制の大転換？ 私をもう一度あの町中に招き入れ、ひとかどの者に変えてくれるような、魔法のような人生変革と勝利の美酒？

いや、羊飼いたちは、そんな非現実的な期待に改めて立つようなところにはもういませんでした。むしろ、得体の知れない天使が突然現れたとき、その出来事を、今や彼らの日常を支配する「不安」や「恐怖」の物差しではかっていたようなのです。そう、彼らとはついに、かの神的な存在は、獣か自然災害か何かのように、自分に何かしらの不幸を

もたらず、と直感しました。彼らがクリスマスのプレゼンター、福音のメッセンジャーを前にただただ怯えていたことは、天使がわざわざ開口一番、「恐れるな」と声をかけなければならなかったことから分かります。そう、クリスマスの出来事は、彼らの現実理解においてはまず、緊張、不安、恐怖をもたらすものに思われたのです。クリスマスをいまだにネオンやツリー、おいしいケーキで祝うことができる者たちは、羊飼いと違う見方で、この天使もロマンティックに眺めるでしょう。私ならどうだろう？ いや、私たちにとても、神こそが得体の知れない怖い方だという感覚が、今や現実問題として誤魔化せないのではないのでしょうか。地震や津波、感染症、こんなにも身近に、毎日多く人々が命を・家族を・家屋を奪われ、共同生活の基盤を奪われて、倒れ散らされ疎外され、かつ身動きができない例外状態に宙づりにされていくのです。神は恐ろしい方ではないのでしょうか。全能者の御手が触れたなら、私たちが大事に守ってきたつむりの日常など、すぐにひっくり返る。教会だってそうです。牧師たちは今、貧すれば鈍する群れの行き先が、先行き不透明で、すでに私たちは天来の裁きの現実の中にあるのではないかと、だれよりも現実的に感じています。闇夜の羊かいたちはどうだったでしょうか。彼らこそ、見えない脅威に怯えてきました。いつ狼が出没するか。いつ群れの羊が失われるか。いつこの命が絶たれ、群れの滅びがもたらされるか。死を前にすることが日常となった人間の視座からは、神こそ恐ろしいとの認識が拭えなかったはずです。

「恐れるな。」しかし、天使の第一声は、恐れを神ご自身が取り去り給うという宣言でした。むしろ天来のメッセンジャーは、「わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる」と言って、人類に対する神の御心を伝えます。クリスマスに相応しいのは恐れではない。だれも疎外されない、民全体の喜びだ。一時的な経済支援や復興事業とか、焼け石に水の安価な喜びとは違う（それも必要だけれど）。それらが根本の問題を解決はしないとの恐怖の現実を知る視座にあっても、なお喜びである福音を告げるといいます。

では、その喜ばしい知らせの内容とはどのようなものだったでしょう。少しでも期待して耳を傾ける羊飼いたちに、天使は何と告げてください。

「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。」 どういうことでしょうか。どうも、ここで告げられたことは、羊飼いたちが期待していたこととは異なった内容、いわば正反対の内容なのではないのでしょうか。

というのも羊飼いたちは、いわば共同体の外から中への回復を期待していたはずなのです。町の中に入って行って、不和なく不安なく、人と密に接することができるように。そうして社会共同体の中心で、せめて日々の糧に困らず、家族や友との関係を回復され、生きて人生の成功と祝福を味わうことができるように。私たちの祈りも、最近では専ら同じ内容です。通常の生活に戻ることができ、命の危険から解放されますように！

しかし天使の告げた福音は「疎外された場所」から「社会共同体の中心」へ、羊飼いたちを招き入れる、という内容ではありませんでした。そうではなく、むしろ神の御子こそ、疎外された者としてお生まれになったから、さあそこへ行け、という内容だったのです。確かにイエスは「**ダビデ(王)の町**」にお生まれになる。しかし、いざお生まれになるとき、母マリアによりそうヨセフが居場所を探しても「**宿屋には彼らのいる場所はなかった**」。馬小屋で不安な夜を過ごさなければならない、というのです。御子は王というにはあまりにも弱弱しく、危なっかしい姿で地上に生を受け、人の家の只中ではなく、家畜や獣でもあるかのように門外で、だれにも一目おかれぬ閑散とした穴ぐらで、飼い葉桶に揺られている。どういうことでしょうか。天使によれば、飼い葉桶は喜びの「**しるし**」というが、どうすればこんな雁字搦めの状態が、喜びを表す天来の記号になるというのでしょうか。

今晚を生き抜くことに必死で、だれより現実主義者の羊飼いたちは、これを聞いてどう感じたでしょう。聞き方によっては、借金返済の足しにもならない、飼い葉桶にあるといっても、羊の餌にもならん贈り物だ、と感じても仕方ない内容ともいえるのです。

しかし、彼らはそうは受けとめませんでした。自らの思いや願いを超えて、天使の側にこそ信実があると示す、重たく深い荘厳な歌声に包まれる経験をしたからです。気づけば天使はいつの間にか大群となり、どの町明かりよりも重たい光が暗闇を打ち負かして輝きます。それに伴い、煌びやかな大合唱が、彼らの頭上で響き渡ったのです。

「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ！」

三密どころではない充満！ 気づけば天から増し加わる軍勢の、全地に満ちる大合唱の只中に、羊飼いたちは置かれていました。天使の告知の中で、「**すべての民のため**」という表現があったことを思い出します。町の中も外もない。**すべての民のための福音**が、ここに語られたのです。天使の前では、神讚美がどこで歌われているかは問題ではありません。たとえ最も他者から疎外された孤独の地で捧げられる礼拝であっても、それが

真実に天来の御声に共鳴するなら、それは御心にかなった讚美と呼ばれることでしょう。

羊飼いたちは気づかされました。外にいてこそ、この声をかき消す喧騒から遠いとすれば、かえって私は神に近い。天の栄光の満ちる場には、どこであれ、確かな安心・平安・平和が約束されている。疎外された現実にもかかわらず、問題はそこにはなく、御心に触れているかどうかなのだ、と。ああ、この讚美の向けられた命がこの地上にあるというのなら、もっと近くで見て見たい。さあ、ベツレヘムに行こうではないか！

ですから、羊飼いが呼びかけ合ったこの言葉、「**さあ、ベツレヘムに行こう**」という言葉は、町の中央に入ろう、という意味ではありえません。町の聖所に憩うとか、多数派がいる真ん中に踏み入るとか、そういうことではない。それはただただ、救い主イエスのもとに行こう、という意味以外の何ものでもないのです。具体的には、疎外された場所から、彼らは出かけて行って、やはり疎外された場所に行く、そしてその上でまた現実に帰ることになるでしょう。城門の外の家なき群れの集まる野っばらから、宿無しのヨセフとマリアが身をひそめる馬小屋へ。彼らの立ちどころには、実際問題として、何の社会的な変化もありません！ クリスマスを境に、その点で何かが劇的に変わるわけではないのです。

疎外された場所から、もう一つの疎外された場所に行こう。では、彼らが今や勇んでそう呼びかけ合う理由は何か。そう、前に居た場所とこれから行く場所との間、クリスマス前の疎外された日常とクリスマス後の疎外された日常との間には、決定的な差異があるのです。すなわち後者には、飼い葉桶に横たわる御子が、疎外された者と共におられる！ そのことを知った者の決定的に新しい日常が待っています！ これが羊飼いの出立の理由。イエスと共にいられるかどうか、それだけが生の羅針盤だと気づいたのです。

「さあ、ベツレヘムに行こう。」 そう呼びかけ向かうべき場所は、天使の告知どおりの、イエスにまみえるあのクリッペ（飼い葉桶の家）です。世の共同体の外でありながら、不安や恐怖に支配されず、御心にかなって天の共同性が輝く礼拝の場所。さあ、今日のイヴ礼拝は、そのような礼拝讚美の場となったでしょうか。羊飼いたちがそうであったように、礼拝の後、私たちはまた、それぞれの生活の場に帰っていくことになるでしょう。しかし、ひとたびイエスにまみえ、信実の讚美礼拝を経験した者は、どんな酷い現実に帰ることになろうとも恐れることはありません！ なぜなら私たちがどれほど人間的な幸いとは程遠い、城門の外に追いやられようとも、その場を真の教会共同体の讚美の場と変えてしまう、真の御子と私たちが出会った事実は、決して取り消されるものではないからです。

祈禱 : 感謝と執り成し〜「ペストの詩」(ツヴィングリ、1520)を踏まえつつ

讃美 : 讃美歌 111 番 1,3 節 「神の御子は今宵しも ベツレヘムに生まれたもう」

慰めたまえ、私たちの唯一の慰め主よ

今日、病に象徴される苦難と不安と死の恐怖のただなかで、

私たちは御子イエス・キリストの誕生の告知を聞きました。

主はこの世の暗闇の只中に来たりたもうて、

私たちをとらえ、御許に引き寄せてくださいます。

「疲れているもの、重荷を負う者は私のもとに来なさい」

御声に応じて立ち帰るとき、私たちは確かにその疎外の現実から、

罪の縄目から解き放たれ、命の平安をえることができるのです。

然り、あなたの御心ならば、罪の痕跡(ひばな)がもはや地上で

私たちを支配することはありません。

私たちは、ただあなたの誉れを、あなたの教えと共に告知します。

私たちはあなたなしには、死んでいたも同然の者

その私たちの救いのために、主は人となられて死の陰の谷をゆき

貧しき者の友として、死を凌駕する命の初穂となられたのです。

今や、私たちは、世を支配するかに見える諸力を前に、

その抵抗と暴力を前にして、御許に集い、おのおのの軛を負ってまいります。

来たるべき御国の報いを臨みつつ、

それなしには何事も全(まっとう)うされない、あなたの助けに身を委ねながら。

主よ、あなたを大牧者とより頼む群れの讃歌を

天におけるように、地にも溢れさせてください。

涙の絶えない病床で、ゆえなく囚われた者たちの獄舎で、

そしてあなたを主と仰ぐ者たちが

二人または三人と集い、愛と真とをささげる教会が生きる

世界のあらゆる場所で。

主の御名によって、アーメン。

3

「神に栄えあれかし」と みつかいらの声すなり

地なる人もたたえつつ いそぎゆきて拝まずや

詩: Adeste fideles laeti triumphantes (ラテン語聖歌、17/18世紀)

曲: ADESTE FIDELES (作曲者不詳、John F. Wade 編、1751)

朗読Ⅴ：マタイによる福音書 2:1-12

イエスは、ヘロデ王の時代にユダヤのベツレヘムでお生まれになった。そのとき、占星術の学者たちが東の方からエルサレムに来て、言った。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」これを聞いて、ヘロデ王は不安を抱いた。エルサレムの人々も皆、同様であった。王は民の祭司長たちや律法学者たちを皆集めて、メシアはどこに生まれることになっているのかと問いただした。彼らは言った。

「ユダヤのベツレヘムです。預言者がこう書いています。

『ユダの地、ベツレヘムよ、

お前はユダの指導者たちの中で

決していちばん小さいものではない。

お前から指導者が現れ、

わたしの民イスラエルの牧者となるからである。』」

そこで、ヘロデは占星術の学者たちをひそかに呼び寄せ、星の現れた時期を確かめた。そして、「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」と言ってベツレヘムへ送り出した。彼らが王の言葉を聞いて出かけると、東方で見た星が先立って進み、ついに幼子のいる場所の上に止まった。学者たちはその星を見て喜びにあふれた。家に入ってみると、幼子は母マリアと共にいられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた。12 ところが、「ヘロデのところへ帰るな」と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。

奉献：讃美歌21 256 番 1、4、5 節 「まぶねのかたえに われは立ちて」

※ 感謝と献身のしるしとして「讃美のささげもの」をいたします。また、府中中河原教会・東京中央伝道所において「イヴ礼拝献金」を受け付け両教会で集められた総額を、札幌豊平教会「無料食堂（無料お弁当配布）」の活動支援のため、同教会にお送りします。次の礼拝時に「イヴ礼拝献金」と明記した封筒に入れてお献げください。送金・振込も受け付けますが、その際は教会（会計担当）にご一報ください。

朗読Ⅵ：ヨハネによる福音書 3:16-21 [礼拝では16、21節のみ朗読します]

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。

神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれぬ。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである。しかし、真理を行う者は光の方に来る。その行いが神に導かれてなされたということが、明らかになるために。」

讃美 : 讃美歌 109 番「きよしこの夜」

1.

きよしこのよる 星はひかり
すくいのみ子は まぶねの中に
ねむりたもう、 いとやすく

3.

きよしこのよる み子の笑みに
めぐみのみ代の あしたのひかり
かがやけり、 ほがらかに

詩: Stille Nacht, heilige Nacht! (Josef Mohr, 1818)、曲: // (Franz Gruber, 1818)

頌栄 : 讃美歌21 24 (=148) 番「たたえよ、主の民、みつかいと共に」

たたえよしゆの た み、み つかいととも に、

めぐみにあふれる ちちこせいれい を

アーメン。

詩: Praise God, from whom all blessings flow (Thomas Ken, 1637-1711)

曲: GENEVAN 100 (OLD 100TH) (ジュネーヴ詩篇歌、16世紀)

派遣と祝福

さあ、平安のうちに行きなさい。

希望と喜びのうちに主に仕え

すべての人に神の愛を伝えなさい。

主は世の終わりまで、いつもあなたがたと共におられます。

主イエス・キリストの恵み、父なる神の愛、聖霊の交わりとが

あなたがた一同と共にありますように。

アーメン。